



北海道の美術の現況と

美術館の必要性について

小川原 脩

絵を描く人が増加している。今日の北海道には相当に多数の美術人がおり、年毎に増加して行く。彫刻をやっている人も工芸にたずさわっている人も絵を描く人と同様増加して行く。この人達のほとんどが春の《全道展》秋の《道展》その他の公募に応じてそれぞれの作品を制作し出品している。数量の増加だけではない。それぞれ内容も充実し、水準も高くなつて来ている。新人といわれる人達が次々と出て来て活況を呈している事は北海道の文化の上からいつて同慶にたえない。

これらの人達のほとんどが、また東京の展覧会目差して制作し、東京でのほとんど総ての展覧会の公募にそれぞれ応募し、出品しているだけでなく、個展やグループ展で活動しているし、また北海道出身で東京で活躍している人の数だつて相当の数である。あるいはまた逆に、北海道の雪がとけ、新緑が芽をふく頃ともなれば次々と東京から様々の美術人達がやつて来て、絵を描き、個展を開いて帰つて行く。また一年に一度は東京で開いた公募展の中から選りすぐつた作品をはる持つて来て札幌で展覧会を開いて見せてくれる美術団体もあるし、新聞社やデパートや画商といった主催者が開く展覧会も限りなくある。このような美術の交流が北海道の文化の水準をささえているともいえる状態である。

札幌ではほとんど休むことなく街のギャラリーで個展や、グループ展が開かれているが、同様に函館や、旭川や、釧路もそれぞれ地方の中心となつて活潑な美術活動が行なわれている。とりわけ札幌はギャラリーといわずデパートといわず応接にいとまなような活況である。このような現象を呈する地方都市は、この国の中でもそんなに数多くあるわけではない。これは北海道の美術活動のエネルギーが並々ならぬものを内包しているものと見てさしつかえない。同時に北海道民の美術に対する受容性の傾向とも見られ、この寛容な態度がどこから来るかは別として、北海道の文化の将来性を考える上での重要なエレメントとして指摘できる点でもあり、これが中心都市札幌に集中的に現われていることも、また当然といわなければならない。

《美術館が欲しい》という声が美術家の中からあげられたのは終戦直後のことであつたと記憶する。われわれの全道美術協会も率先してこの運動に参加して来た。十数年を経過してもまだ実現のめども見出せずにいることは誠に残念なことである。それどころか、こ



の美術家達の声が外部の社会に対して何程の反響も呼んでいないのではないかと反省させられる。この運動が美術家の最大の要求から発せられたことはもちろんだが、単に美術家だけの、あるいはこれに同調する一般文化人といわれる人達だけの問題ではないはずなのだ。現状は依然として好転しているとはいえない状態である。

恐縮ではあるが、われわれのやつている《全道展》の会場に足を運んで見て頂きたい。会場である④デパートの長年に亘る好意でどうにか十六回展まで続けて来たのであるけれども、年毎に増加する出品点数と、画面の大型化と、内容の質的な向上によつて随分無理な審査を強行している現状である。そのために陳列外となつた多数の作品と作家に対して、これ以上どうすることも出来ないような厳選をここ数年連続して来ており、この傾向は目下のところ激化こそすれ、緩和の見込みは全くない。だから実に立派な作品が次々と陳列外に落ちてゆく。会場に陳列された一点の作品の陰には多数の陳列外の作品があることを考えてみて頂きたい。

しかも与えられた壁面は毎年百間を上廻るものであるけれども、これに無理押しに押し込んでしまつて見苦しい壁面になることを出来るだけ避けて、デパートという環境に調和するために、見やすく陳列して多少とも観客に苦痛を覚えるようなことのないように陳列委員達が努力しているものの、かろうじてそれらしく感じとれる程度の陳列にならざるを得ない状態である。

われわれがこの通りであり、同じようにこの⑤デパートを会場としている他団体の展覧会も全く同様の苦しみをなめているのが現状である。

これが《美術館が欲しい》ということの最大の理由であると同時に《美術館》というものに就て二つの機能があることを考えなければならぬ。一つは今迄書いて来た通り関係団体の行なう時季的な公募展その他の機動的に行なう展覧会場であり、もう一つの機能はいわば古典となつた美術品の常設的な美術館である。本来この二つは別々のものであり、それぞれ別個の美術館であるべきものであるが、現状ではわれわれはこの二つの機能を交互に果たすことの出来る一つの美術館でも結構であると考えている。

道内にある古美術品や、個人所有の美術品、古典といわず、現代作家の作品といわず、常時企画し陳列して展覧することによつて北海道の美術家、美術愛好者、また一般市民に芸術的な感動を提供しながら、この二つの機能を同時に、あるいは交互に果たすことのできる美術館、そういう美術館を欲しているのである。

北海道は大自然を売りものにして来た。この見事な大自然の中で札幌市は六〇万を超える人口を数える大都市に発達したのである。いかに北海道そのものの経済の基盤が若いとはいつても、そろそろ美術館ぐらゐは設備しなければならない程の発展の様相である。これからは海外都市との交流も盛んになることだろうし、ヨーロッパその他の都市並みに美術館を設備して、われわれの誇りとすることの大自然の中に人間の文化の営みの高さを端的に表現することが大札幌市を内容的に充実させる一つの重要な考え方でもありはしないか。

北海道といわず、札幌市といわず、あるいは財界人といわず、一般市民といわず、われわれのこの提案に耳を傾けて、われわれの運動に指針を与え、力をかけて頂いて実現に進みたいものと心から希うものである。(一九六一・五・二五)